

トップインタビュー

スピーカー： キリンホールディングス(株) 常務取締役 古元良治

撮影： 2008年5月下旬

テーマ:平成20年12月期第1四半期決算概況、キリングループの財務戦略について

1. 平成20年12月期第1四半期決算概況と決算のポイント、平成20年見通しの変更について
2. キリングループの財務戦略と今後の展開について
3. お客様、株主様へのメッセージ

1. 平成20年12月期第1四半期概況と決算のポイント

Q: 平成20年12月期第1四半期決算のポイントについて教えてください。

A: はい。業績のポイントの前に、今回より開示方法が少し変わった点があるので、そこからお話ししようと思います。

昨年末に協和発酵グループとの提携、そしてオーストラリア No.1 の乳製品・果汁飲料会社であるナショナルフーズの全株式を取得し、キリングループ全体の規模は大きく拡大しました。2015年に向けた長期経営構想に掲げている、「食と健康」領域での事業拠点の拡充、飛躍的成長の実現に向けて一步前に進みました。同時に、グループとして今後、健康・機能性食品事業の領域に取り組んでいくための経営体制の見直しに伴い、食品等の事業は「飲料事業」と一体として経営管理していきます。決算開示の点からも、事業セグメントを「飲料事業」から「飲料・食品事業」へ変更することとしました。具体的にいうと、キリンビバレッジなどの「飲料事業」に加え、今まで「その他事業」に区分していた食品、健康・機能性食品このセグメントへ移行することになります。今年度より新たに加わったナショナルフーズも飲料・食品事業セグメントに属します。

Q: なるほど。そうすると、協和発酵グループの業績は決算開示上、全て医薬セグメントに組み込まれているのですか？

A: 協和発酵グループは、医薬事業以外に食品事業、バイオケミカル事業、化学品事業を持っています。医薬事業は、以前に加藤社長よりご説明させていただいたように、協和発酵とキリンファーマは、合併して協和発酵キリンを今年の10月に設立します。協和発酵キリンの医薬事業は医薬セグメントとなります。一方、食品事業は、飲料・食品セグメントに、バイオケミカルと化学品事業はその他事業に入ります。

Q: 協和発酵グループは4月1日にキリングループの連結子会社となったのですよね？

A: そうです。昨年末にTOB、株式公開買付によって持分適用会社となっていたのですが、4月1日にキリンファーマとの株式交換を経て、連結子会社となりました。そのため、第1四半期決算発表と同時に通期業績予想を変更し、売上高24,000億円、営業利益1,640億円、経常利益1,510億円、当期純利益1,300億円に上方修正しています。

Q: 各事業の業績概況について簡単に教えてください。

A: はい。第1四半期の連結業績は、オーストラリアのナショナルフーズが新規で加わったこと、海外酒類事業ライオンネイサンのビジネスが好調のため、増収となりましたが、主に原材料価格の高騰や飲料事業キリンビバレッジと医薬事業キリンファーマの販売数量が前年を下回り、また、ナショナルフーズ取得によるのれん代の償却が影響し、減益となりました。また、営業外損益については、ナショナルフーズ関連の豪ドル建て貸付金が3月末の円高の影響で為替差損が出て、経常利益、当期純利益とも減益となりました。

ただ、この為替の評価損は現時点の為替レートでは解消しています。キリンビバレッジ、キリンファーマとも足元4月の状況を見てみると、販売も好調です。通期予想の達成は決して容易ではありませんが、グループ総合力を生かし達成したいと考えています。

2. キリングroupの財務戦略と今後の展開について

Q: 古元常務はキリングroupのCFO、最高財務責任者でいらっしゃいます。昨年末の大型M&A案件ではかなり大きな投資額だったと思いますが、資金はどのように調達したのでしょうか？

A: はい。中期経営計画の財務戦略に沿い、飛躍的な成長のための事業投資の資金調達については有利子負債を利用します。3月に無担保社債を発行しました。2,000億円規模の起債は、キリングgroupとして初めてです。サブプライム問題が吹き荒れる厳しい市場環境の中で、予定通り、好条件で引き受けてもらえました。

もともと昨年末に約3,000億円短期借入を行っております。今回の2,000億円の起債を除く残高約1,000億円程度については、一部実施済みですが、今後長期の借入に組み替えていく予定です。

Q: 中期経営計画で掲げた戦略事業投資額の枠は3,000億円でした。既に超えています。今後のM&Aについて考え方を教えてください。

A: 中期経営計画で投資に備えた額はあくまで目安です。特に固定枠の設定はせず、チャンスがあれば、案件ごとに判断していきます。具体的な資金調達方法については、財務の健全性格付けなども勘案しながら検討していきたいと思っています。

Q: 今回の決算でもインパクトがありましたが、海外に事業投資を行っていく上では、為替リスクは避けて通れません。為替についての考え方について教えてください。

A: はい。確かに、海外事業の拡大を目指す上で為替の影響は避けられませんが、これはコントロールできるものでもありません。キリングgroupとしては、海外事業の比率向上を目指し、事業に投資しているので、その市場での事業の成長が鍵になります。為替換算による売上げと利益増減については、今後リスクのひとつとして考えて対応していかなければと思っています。

Q: 今期の業績予想を見ると、中期経営計画を前倒して達成しそうな勢いですが、中期経営計画の定量目標はそのまま維持していくのでしょうか？

A: もちろん、M & Aの影響も大きいですが、中計を策定した1昨年と比べ、ビジネス環境も大きく変化しています。8月の中間決算発表時に、現中計の目標だけでなく、戦略の一部も見直して修正中計として開示する予定です。

Q: 株主還元の方針はどのようにお考えでしょうか？

A: 株主の皆様へ適切な利益還元は、経営における最重要課題のひとつと考えています。昨年まで4期連続で増配していますが、今期は2円増配の23円を予定しております。4月に協和発酵グループと株式交換をした影響で約750億円の持分変動利益が出たため、今期予想では前年に比べ純利益が大きく増益します。でも、これは会計処理上で発生する利益であって、実際にキャッシュが入ってくるわけではありません。キリングroupでは、連結配当性向30%以上を指標としていますが、基本的にはキャッシュベースの実質的な利益水準を考慮していきたいと思っています。このような会計処理上の利益や、飛躍的成長のための事業投資により大きく増加し、利益を押し下げているのれんの償却についての影響は排除して皆様への配当案を策定していきたいと思っています。

3. お客様、株主様へのメッセージ

Q: 最後にお客様、株主様へのメッセージをお願いいたします。

A: はい。いつも当グループの商品をご愛用頂き、ありがとうございます。

当社は昨年創立100周年を迎え、新たなスタートを切りました。既存の事業会社による成長に加え、飛躍的成長を実現するために事業提携・アライアンスを行いながらグループシナジーを最大化するため、積極的な事業戦略を進めています。グループを挙げて業績向上を目指し、企業価値を高めて、皆様のご期待に沿えるよう邁進していきたいと思っています。

もちろん、ビール、清涼飲料をご購入いただけるお客様のご支持なしでは達成できません。どうか引き続き変わらぬご支援いただきますようよろしくお願い申し上げます。

Q: 古元常務、本日はどうもありがとうございました。

A: ありがとうございました。

以上